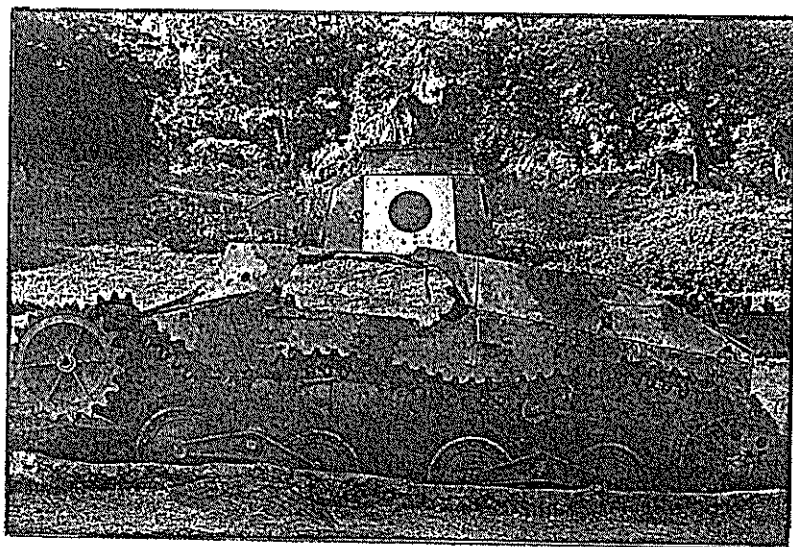


太平洋戦争の激戦地

サイパン島紀行

写真集



平成6年4月30日～5月3日

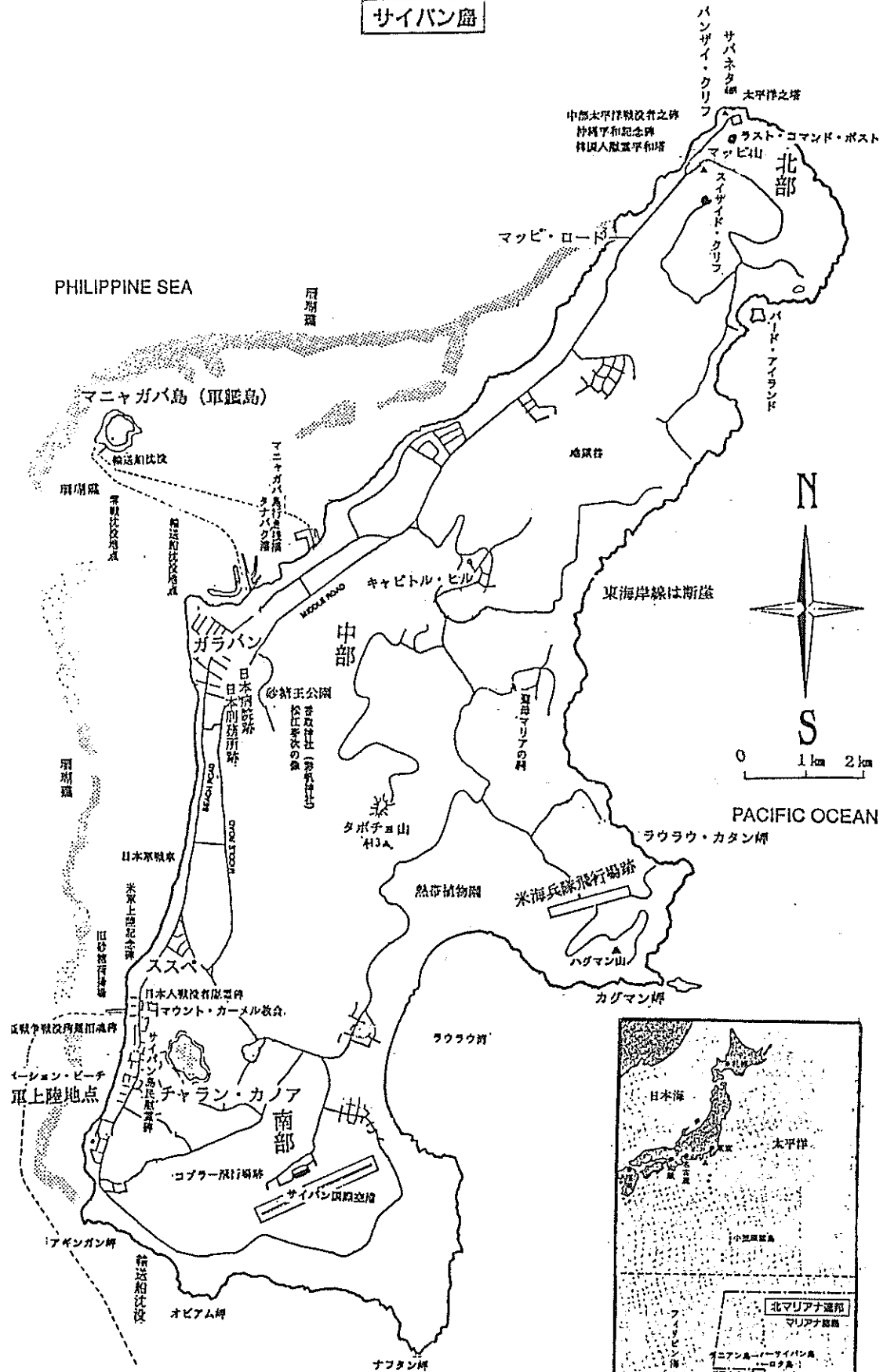
(1994年)

寺前信次

サイパン紀行写真集 目次

サイパン地図	・・・ 1	砂糖王公園	・・・ 1 2
サイパン島の概要	・・・ 2	香取神社	・・・ 1 3
南部地区	・・・ 4	日本病院跡	・・・ 1 3
サイパン国際空港	・・・ 4	日本刑務所跡	・・・ 1 4
チャラン・カノア・ススペ	・・・ 5	タナパグ港	・・・ 1 4
米軍上陸地点	・・・ 6	キャピトル・ヒル	・・・ 1 4
米軍上陸作戦の概要	・・・ 7	聖母マリアの祠	・・・ 1 4
米軍上陸作戦	・・・ 7	タポチョ山	・・・ 1 5
インベーション・ビーチ	・・・ 7	北部地区	・・・ 1 6
マリアナ沖海戦	・・・ 8	サバネタ岬（バンザイ・クリフ）	・・・ 1 8
大東亜戦争戦没殉難招魂碑	・・・ 9	バンザイ・クリフの慰霊の数々	・・・ 1 9
日本軍のトーチカ	・・・ 9	ラスト・コマンド・ポスト	・・・ 2 0
マウント・カーメル教会	・・・ 1 0	スイサイド・クリフ（自決の崖）	・・・ 2 3
米軍上陸記念碑	・・・ 1 0	マニャガハ島	・・・ 1 5
中部地区	・・・ 1 1	記念写真	・・・ 2 9
日本軍戦車	・・・ 1 1	昔のサイパン風景	・・・ 3 0
ガラパン	・・・ 1 1	短 歌	・・・ 3 3

サイパン島



サイパン島の概要 (北マリアナ連邦)

サイパン島は西太平洋マリアナ諸島の火山島で、グアム島の北に位置している。面積は185km²で淡路島の3分の1強の小さい島で、人口は約4万3000人(1993年)である。

サイパンを含むマリアナ諸島が、その存在を知られるようになったのは、ポルトガルの探検家「マゼラン」(1480?~1521)がイスパニア(スペイン)の朝廷に仕え、世界一周の旅に出発して1521年に同島を発見してからである。

1565年、スペインの「レガスピ」が同島に上陸し、この付近一帯の島々を正式にスペイン領とする旨を宣言した。マリアナ諸島の名称の由来は、当時のスペインのマリア・アナ女王の名にあやかって命名された。

約300年のスペインの統治の後、1899年、米西(米国とスペイン)戦争の終わりに、スペインはサイパンをドイツに売り渡した。

第1次世界大戦が始まると、日英同盟によって日本はドイツに宣戦を布告し、1914年10月14日、それまでドイツ領だったサイパンを、日本の戦艦「香取」が無血占領した。1919年に調印されたベルサイユ条約で日本は国際連盟の委任を受け、サイパンを委任統治することになった。

第2次世界大戦末期の1944年6月15日(昭和19年)、アメリカ軍は西海岸に上陸して島内に進攻し、圧倒的に物量に優る米軍は日本軍を島の北部に追いつめ、ついに7月6~7日に玉砕した。

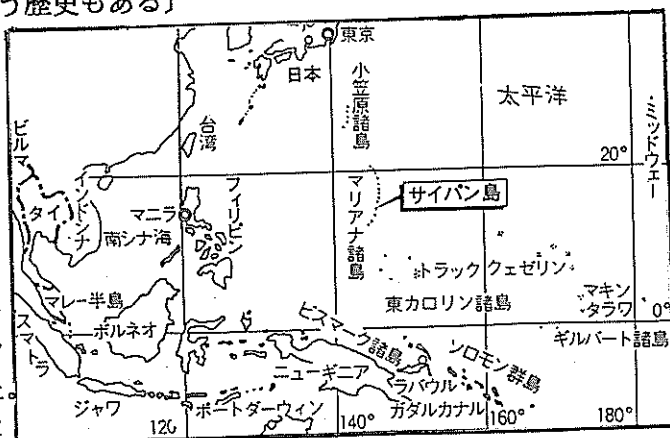
第2次世界大戦後にアメリカの国連信託統治領となり、1986年に自治政府・北マリアナ連邦(アメリカの自治領であるが独自の政治社会を持つ)として今日に至っている。

サイパンはグアムと同様、古くからチャモロ族が住んでいたが、カトリックの強制的な布教に反抗して1670年に宣教師を殺害し、スペイン政府によってグアムに強制移住させられ、1698年以降は無住の地となった。

〔何百人ものチャモロ人がマゼランの船を取り囲んだことから、彼はこの島を「カヌーの島と名付けたと言う歴史もある〕

その後の1800年の初め、カロリン諸島(右図参照)から幾度か移住が行われ、1815年には台風によって住居を失ったトラック諸島の島民200人が集団移住したことが知られている。

ドイツ領となってからチャモロ人とカロライナ人(カロリン諸島の人種)の移住を奨励した。カロリンからの移住者のカロ



ライナ人を中心に、島の西海岸に「ガラバン」の町がつけられた。ガラバンにはドイツ時代（1899～1914）、日本時代（1914～1944）ともに支庁が置かれ、マリアナ諸島の政治的中心となっていた。

〔我々一行が宿泊したハファダイビーチホテルはガラバンである〕

第1次世界大戦後に南洋群島を委任統治領とした日本は、以来多くの日本人がサイパンに移住し、各種の産業に従事した。

特に製糖産業が盛んで、その代表的企業は「南洋興発会社」であった。多数の日本人がこの会社の下で小作として働き、1930年当時の日本人の人口はチャモロ族、カロリン諸島人の合計の3倍以上であった。

第2次世界大戦中の1944年3月、日本政府は小笠原諸島～サイパン、グアム～インドネシアの線を絶対国防線と決定し、それまで海軍が守備していたサイパン島にも陸軍部隊が投入された。

一方、アメリカも1944年3月、日本本土を爆撃する長距離爆撃機の基地を造るため、マリアナ諸島奪取の指令を発令し、ここにサイパンの悲運が定まった。

日米のサイパン島の攻防戦は1944年6月中旬から開始され、24日間にわたる戦闘は彼我ともに甚大な犠牲を出した。日本軍の戦死者は3万人以上といわれ、米軍も戦死者3500人以上、負傷者1万5000人以上で、400人以上の島民も犠牲となっている。（戦闘の概要は各地域で記載する）

〔時の日本の総理大臣であった東条英機陸軍大將は、サイパン陥落の責任をとって辞職した〕

今日のサイパンは楽園の島となっている。第2次世界大戦の戦跡を訪ねる人々を始め、澄んだ空気や熱帯の風物に憧れながらマリンスポーツを楽しむ人達で賑わい、ハワイやグアム同様に観光地である。

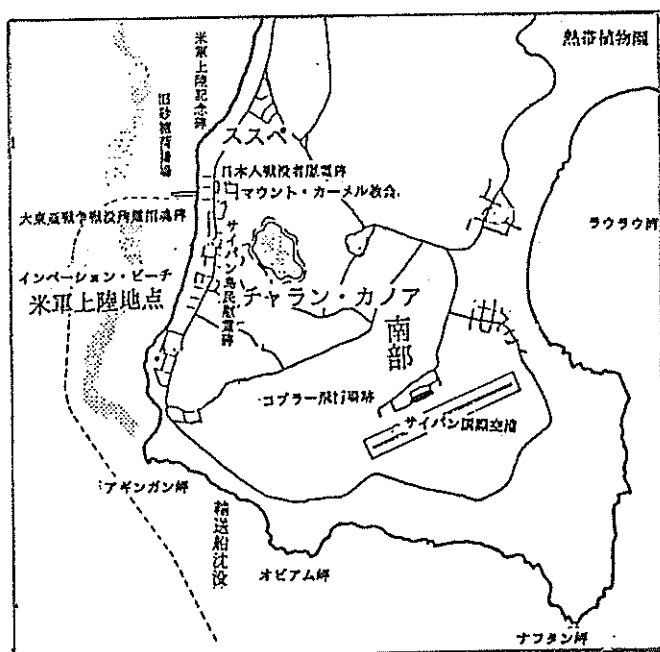
サイパンの西海岸は水晶のように透明な海水と清潔な白砂の浜に恵まれ、その他の海岸には絵に書いたような断崖や岩礁に碎ける美しい波浪があり、紅蓮の花を咲かせた南洋桜（フレイムツリー）など、島全体が桃源郷を彷彿させるものがある。

（下はハファダイビーチホテル玄関の記念写真）



南部地区

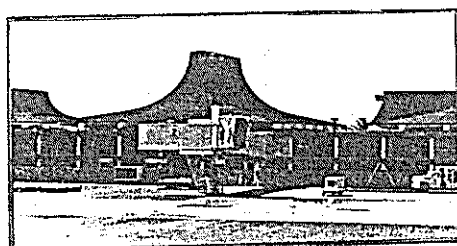
サイパン南部地区を説明するために、右の要図を掲載する。



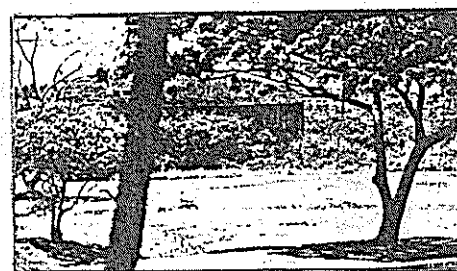
〔サイパン国際空港〕

サイパン島の東南部に位置する国際空港は、1967年に完成したもので、マリアナの空の玄関に相応しく、諸島第一の近代的な施設を誇っている。

檜皮葺（ヒワダブキ）の屋根のユニークな空港ビルは、南洋諸島らしい開放的な雰囲気を漂わせている。



しかし空港ビルの内部は薄暗くゲートも3ヶ所、先進国から見れば島嶼の空港の域を出ていない。

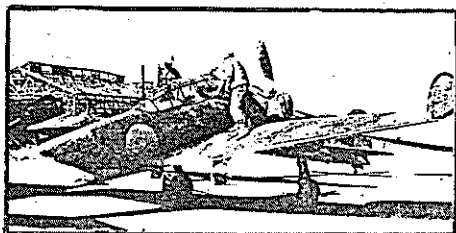
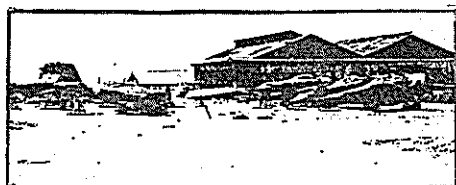


空港周辺には旧日本軍のトーチカや弾薬庫が今もなお残り、激戦当時を偲ばせている一方、南洋桜のフレームツリーが真っ赤な花を咲かせていた。

（右上の写真は滑走路から眺めた空港ビル、下は旧日本軍のトーチカ）

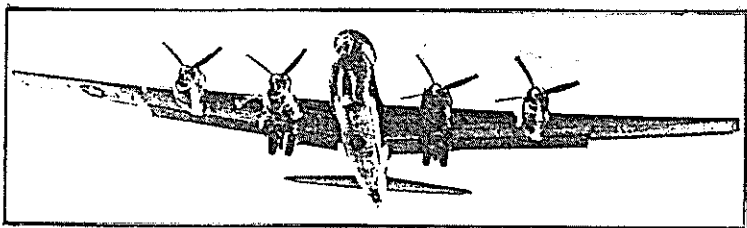
現在の空港が完成するまでは、西方約1kmのコプラ飛行場が使用されていた。別名をアストリート飛行場と称し、かつては日本軍の空軍基地となっていた。(地図参照)

米軍のサイパン攻撃は非常に迅速に予期せず行われたため、アストリート飛行場が占領されたとき、日本軍の飛行機の中にはまだ飛行可能なものが数機残っていた。



(右上の写真は日本軍の格納庫と飛行機、下は日の丸をつけた零式戦闘機)

1944年6月にアメリカ軍に占領されてからは、アストリート飛行場はB-29爆撃機の戦略基地として使用され、東京を始めとする日本各地の空襲も、この飛行場から発進したのであった。



(右上の写真は初めてアストリート飛行場を飛び立ったB-29爆撃機)

米軍のマリアナ諸島占領の主目的は、前記したように日本本土攻撃の前進基地を準備することであった。攻撃の要(カナメ)となっていたB-29は、当時「空飛ぶ要塞」と言われていた。

B-29の最大積載量は9000kg、最高時速640km、航続距離8500kmで、1944年11月1日、初めて東京上空を飛行した。その時、私はビルマ(ミャンマー)に赴任する飛行機を待つため、九段の偕行社に宿泊していた。

〔チャラン・カノア、ススペ地区〕(前頁地図参照)

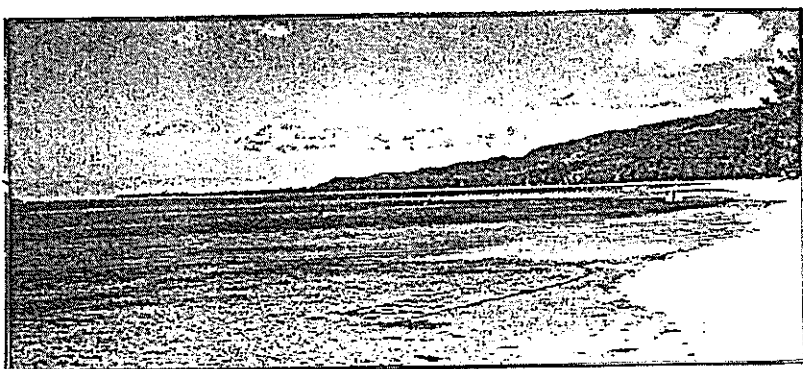
サイパン国際空港から車で約10分、ビーチ・ロード沿いに開けた「チャラン・カノア」はサイパン最大の町で、デパート、スーパー、青空市場、レストラン、映画館などが集り、地元の人たちで賑わっている。

続く「ススペ」はサイパンの首府で、官庁街には北マリアナ連邦本部をはじめ裁判所、警察署、議会などが集り、北マリアナの行政の中心地である。

〔米軍上陸地点〕（4頁地図参照）

インベーション・ビーチは1944年6月15日、空爆と艦砲射撃の支援のもとに米軍が上陸した白砂の美しい海岸である。

（右の写真は現在のインベーション・ビーチ）



この海岸線はサイパン島では珍しく砂浜が2kmほども続き、敵前上陸をするのには絶好の地である。この地以外の地形は断崖と高地が連なり、彼我ともにインベーション・ビーチを上陸地点と予想したであろう。

ここで当時の日米の状況と上陸戦闘を回顧するのも無ではないだろう。

サイパンを守備していた最高責任者の31軍司令官「小畑英良中将」は、各諸島に配置した隷下部隊の巡視のためにサイパンを離れており、その留守中に米軍が上陸した関係から、戦記には殆ど同中将の名前はない。

（31軍の管轄は南北マリアナ地区、トラック地区、小笠原地区であった）

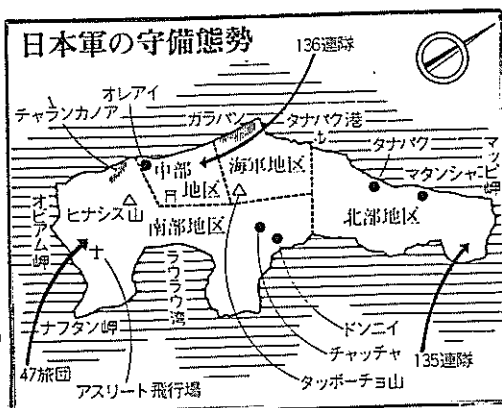
サイパン島に上陸して守備していた陸軍部隊は43師団、独立混成47旅団、歩兵第18連隊、歩兵第50連隊、軍直轄の戦車第9連隊、高射砲第25連隊等で、海軍は第5根拠地司令部と落下傘部隊の約600人である。

米軍上陸時の日本軍の総兵力は陸軍約2万9000人、海軍1万5000人の約4万4000人で、在留報人は約2万人、現地住民は約4000人とされている。

斉藤義次中将（陸士24期、少将で招集されて中将に進級）の指揮する名古屋編成の43師団は、歩兵135連隊、136連隊、118連隊、砲兵大隊（普通は連隊）、工兵中隊（普通は連隊）、通信中隊、衛生隊、補給中隊（普通は連隊）の総員1万6000人である。（右下は日本軍の配置図）

基幹部隊のこの師団は幹部も兵も殆ど招集者の寄せ集めの部隊で、戦力は私が所属して戦った師団の2分の1程度と推定される。不運にも米潜水艦によって歩兵118連隊の3600名が海没し、石灰岩のために陣地構築も困難のまま、サイパン到着後1ヶ月足らずで米軍を迎えた。

独立混成旅団は後方地区の警備を担当する部隊に過ぎず、急いで満州から移動した混成47旅団の戦力も、私が戦闘で経験した旅団の3分の1程度であろうか。



「米軍のサイパン上陸（6月15日）前の状況」

6月10日

日本海軍の連合艦隊は米軍機動部隊と海上決戦するために出動。海戦の状況は後記。

6月11日

米海軍空母機動隊の艦載機200機が初めてサイパンに出撃し、攻防戦が開始された。日本の海軍航空隊の偵察機は米艦隊や輸送船団を発見していない。予想もしなかった不意急襲により、迎え討った日本軍は空中・地上合計147機を失う。

6月12日

爆撃と機銃掃射に出撃した米軍の戦闘爆撃機は、日本軍の空中反撃は僅かであったが、前日よりも正確な対空砲火に出合った。そして12、13、14の3日間、米海空軍は間断なく猛爆を続け、日本軍守備隊は甚大な損害を蒙った。

6月13日

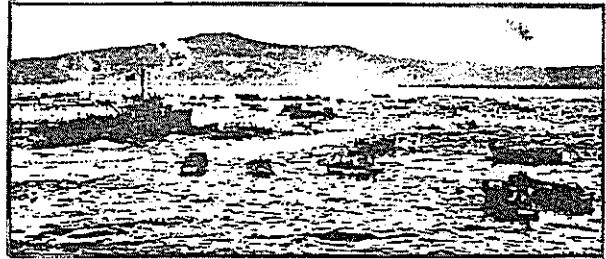
午前9時45分から艦砲射撃が始まる。米軍の戦艦・巡用艦・駆逐艦の数は500隻以上で、海上は軍艦で真っ黒になったという。

ドラム缶のように見える砲弾がうなりを上げて飛来し、チャラン・カノアの町は完全に破壊された。

「米軍の上陸作戦」（インベーション・ビーチ）

6月15日午前5時、750隻の大小艦船、10万人の徒歩部隊、25万人の水兵を集めて行われたマリアナ作戦が幕を切って落とされた。

午前5時45分、米艦船は一斉に砲門を開き、前日、前々日より更に激しい砲撃が傷ついた島に加えられ、陸も海も鳴動した。



午前7時、米軍機165機が飛び立って決定的な援護射撃を開始した。

午前8時、搭乗艦から上陸用舟艇の第一波700隻がサイパン島に蟻のように迫り、第2、第4海兵師団が上陸したのは午前8時43分であった。その後、30分以内に8000人が上陸し、夕刻までに2万人が上陸を敢行した。

（上の写真はインベーション・ビーチを目指し、怒濤のごとく押し寄せる米軍の上陸用舟艇群。日本軍は激しい砲爆撃を浴びせ水際撃滅をはかったが、次から次へと繰り出す舟艇に、ついに上陸を許した）

この戦闘で岐阜の136連隊は主力を失い、同夜行った夜襲でも日本軍は7千名の戦死者を出したが、上陸した米軍は戦車を横隊に並べ、火炎放射器で日本軍の逆襲を防戦し、弾幕を張ったと伝えられる。これは私が戦ったビルマの戦闘と同じである。

一方、米軍の死傷者は2000人に達し、上陸用舟艇の30%、戦車や大砲の15%の損傷を出している。それにしても輸送途中に米潜水艦の攻撃で兵器や弾薬などを喪失した日本軍が、劣勢な装備でよく敢闘したと信じている。

「マリアナ沖海戦」

絶海の孤島の守備は陸軍で守り切れるものではない。太平洋戦争は海・空軍の戦闘が主体であり、陸軍の主戦場は大陸である。さぞかしサイパン島の将兵は我が連合艦隊の反撃を待ち焦がれていたことであろう。

6月19日、サイパン島、テニアン島を包囲していた米艦隊が、急にその数を減らした。今まで海を真っ黒に埋めていた軍艦が歯が抜けたようになった。これは日本の機動部隊がマリアナ方面に向かっていることを知ったからであった。

6月19日朝7時30分、日本の空母から第1航空戦隊の128機がまず飛び立った。ついで第2戦隊49機、そして第3戦隊78機が空母の甲板をけた。

スクールと乱雲の中を第2次攻撃隊72機が出発したのは午前10時を過ぎていた。そのころ前記の第1次攻撃隊が米機動部隊を発見した。

一方、4群の空母群と、1群の戦艦群に分かれて行動中の米艦隊から、一気に450機の戦闘機、雷撃機、爆撃機が飛び立った。そして強力な戦闘機の壁を作って艦隊を守り、他は日本の空母、戦艦の攻撃に向かった。

日本の第1次攻撃隊は米戦闘機の壁に向かって突進する形になった。見る見るうちに火を噴いて海に落ちた。米軍は予めレーダーで日本機の高度を知り、日本機よりも高い高度で待ち構えていたのであった。（高度を敵機よりも高くとるのが第1の戦法）

米艦隊の防空砲火も、まるで鉄と火の壁であった。その火の壁の中で日本機は次々と落ちていった。

3万4千トンを超える新型空母「大鳳」に米潜水艦の魚雷が命中したのは、6月19日午前8時すぎであった。燃料タンクに引火して大爆発、10分後に沈没した。

さらに空母「翔鶴」も魚雷を受けて午後2時ごろ沈没した。決戦第1日は日本軍は空母2隻と350機の飛行機を失った。

6月20日はマリアナ沖決戦の第2日目である。小沢治三郎司令長官の指揮する手持ちの飛行機は殆どなかった。全機360機のうち既に315機を失っていた。

その日の午後になって約300の米軍機が襲ってきた。残っていた日本機が次々と飛び立って反撃したが問題にならなかった。

旗艦「瑞鶴」も襲われた。空母「飛鷹」も雷撃機から何本かの魚雷を受けて航行不能となった。そして潜水艦の魚雷を打ちこまれて間もなく沈んだ。

日本海軍は参加した空母9隻のうち3隻が沈没され、4隻が損傷を受けた。残っている飛行機のうち、修理可能な機数は25機であった。

20日夕、連合艦隊司令長官は小沢中将の指揮する機動部隊に「戦場から離脱せよ」と命令し、日本海軍は先のミッドウェー海戦に続いて大敗を喫したのである。

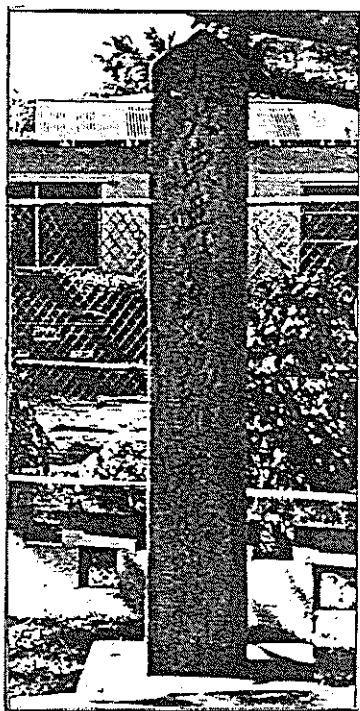
我が大本営はマリアナ沖海戦の戦果を発表した。敵空母4～5隻を撃沈、飛行機160機以上を撃墜したなどの発表であった。

しかし、アメリカの軍艦は1隻も沈んでいなかった。損傷艦4隻、飛行機の損害は戦闘で33機、夜間の着艦失敗で73機、合計106機であった。

米艦隊はまたサイパン島周辺に帰り、サイパンの守備隊を攻撃したのである。

日本海軍の敗戦の原因はレーダーの優劣と、優秀な操縦手をミッドウェー海戦で失って未熟者ばかりであったことが上げられるが、物量に現われた経済力の差は如何とも出来なかったのである。

〔大東亜戦争戦没殉難招魂碑〕と〔日本軍のトーチカ〕（位置は4頁地図）



米軍上陸地点のインベーション・ビーチに沿ったビーチ・ロードを北に走ると、左手に鄙（ヒナ）びた石碑が立ち、「大東亜戦争戦没殉難招魂碑」と彫まれている。太平洋戦争は当時の日本では、東亜を開放する意味で「大東亜戦争」と呼んでいた。

その石碑の近くのインベーション・ビーチに、旧日本軍のトーチカの跡のコンクリートの一部が残り、ココヤシの葉陰に包まれている。日本軍兵士は米軍の艦砲射撃にもめげず、上陸用舟艇を射ちまくったことだろう。

（上の写真の左は大東亜戦争戦没殉難招魂碑、右は旧日本軍トーチカの跡）

〔サイパン島民慰霊碑〕（右下の写真、位置は4頁地図）

大東亜戦争戦没殉難招魂碑の反対側で

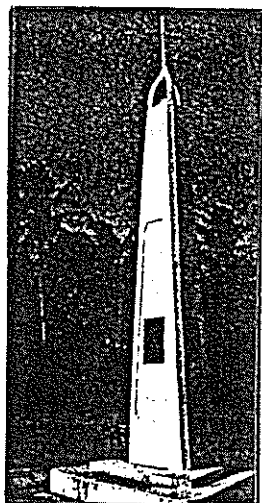
チャラン・カノア中央の三叉路に立って

いるのが、戦争の犠牲となった島民を慰

霊する「サイパン島民慰霊碑」である。

当時、チャモロ族やカロライナ族は約

5000人ほど住んでいた。

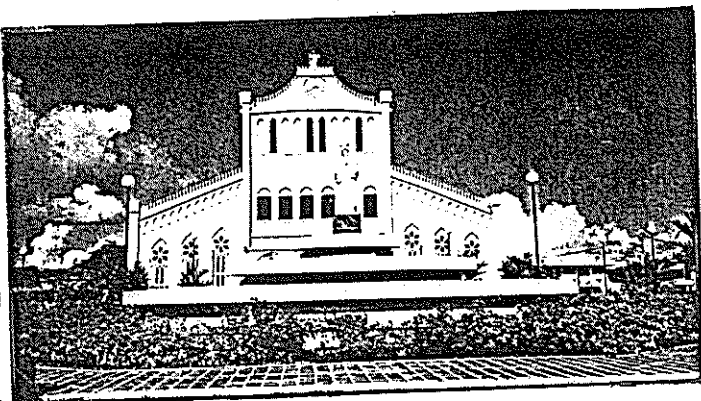


〔マウント・カーメル教会〕（右下の写真、位置は4頁地図）

サイパン島民慰霊碑の北側に見える白亜の殿堂がマウント・カーメル教会で、チャラン・カノアの町の最北端である。

気品のある華麗なこの建物はスペイン統治時代に建てられたカトリック教会で、戦禍で消失したが戦後再建され、現在は北マリアナ諸島の全カトリック教会を総括する格式の高い教会である。そのため公式行事はスペイン風のこの教会で行われる。

1668年、スペインは恒久的な布教本部をここに設立した。天然痘などの疫病がチャモロ族の人口を減少させたが、生き残ったチャモロ族はカトリック教徒になった。



〔日本人戦没者慰霊碑〕（右下の写真、位置は4頁地図）

マウント・カーメル教会のすぐ近くに、日本人戦没者慰霊碑がひっそりと立っている。

インベーション・ビーチに面してるから、米軍上陸時には多くの犠牲者を出した場所であろう。

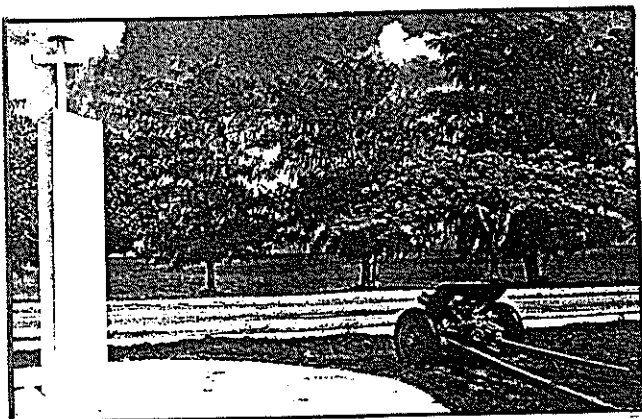


〔米軍上陸記念碑〕（右下の写真、位置は4頁地図）

インベーション・ビーチの最北端のビーチ・ロードに、サイパン戦で戦死した米軍約3500名を慰霊するため、米軍上陸記念碑が立っている。

大理石の白い塔の上に十字架と鉄甲があり、塔の両側に日本軍の速射砲（対戦車砲）が据（ス）えられている。

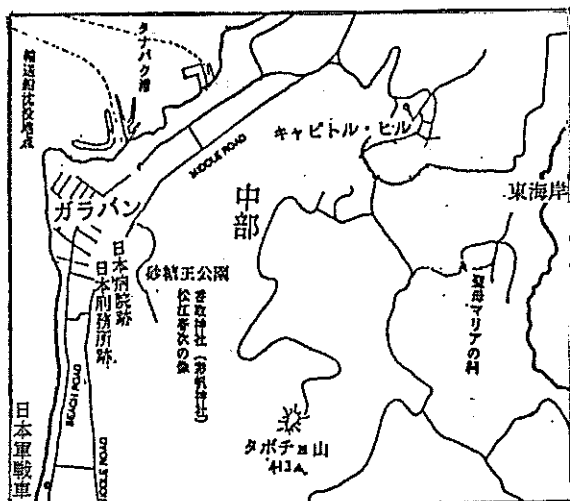
米軍上陸時の戦況は混沌として不明だが、エメラルドグリーンの海は血で染まっていたと伝えられている。



中部地区

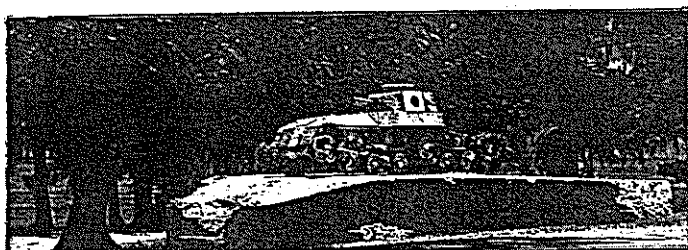
中部地区は南部のススペ北方から
タナバグ港、島の最高峰タボチョ山
(473m) からキャピトル・ヒル、
及びその東海岸の地区である。

(右の地図参照)



〔日本軍戦車〕

ススペから中部の繁華街ガラパンに向ったビーチ・ロードには真っ赤な南洋桜(フレームツリー)が咲き乱れ、その街路樹に覆われた林の中に1輛の戦車が据えられている。



サイパンを訪れる人は必ず目にしなければならない日の丸を付けた戦車を、どのような感懷で眺めるだろうか。(上の写真は南洋桜の下にある旧日本軍戦車)

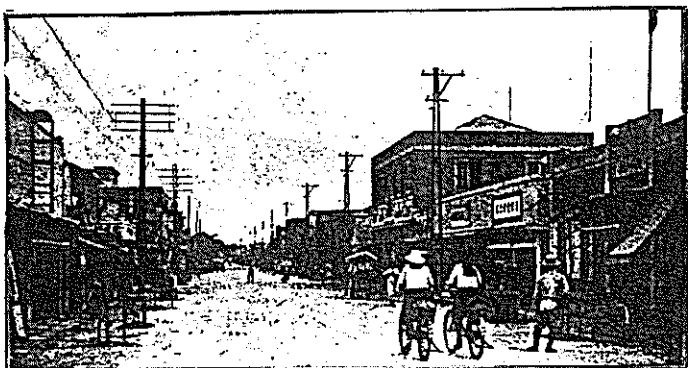
〔ガラパン〕

ガラパンは日本統治時代には島の政治・経済・文化の中心地であった。

現在はサイパン第一といわれる美しい白砂のビーチがあり、そこに豪華なホテルを中心にした街が形成されている。

メンストリート(ビーチ・ロード)沿線にはレストラン、免税店、ブティック、日本料理店、ショッピングセンター、シーフードなどの店が連なり、ナイトクラブなども集まった最も華やかなリゾート基地となっている。

(上の写真は戦前のガラパンの市街風景の一部)



〔砂糖王公園〕

日本軍戦車の位置から更にビーチ・ロードを北上すると、右手に白亜のガラパン教会が見えてくる。そこを右折して山手に突き当たったところがシュガーキング・パークである。

砂糖王とは日本統治時代に南洋興発会社を興し、砂糖キビの栽培と製糖事業に成功した福島県出身の松江春次のことである。

彼はサイパン島のほかテニアン島にも進出し、北マリアナ諸島の経済を発展させ、南洋の満鉄と賞賛された。その業績を記念するために造られたのが砂糖王公園で、日本統治時代には「彩帆公園」と呼ばれていた。

公園の入口のところに赤い色で塗った豆蒸気機関車が据えられている。製糖産業が盛んであったころには、シュガートレインの軽便鉄道線路が全島に敷設され、砂糖キビや燃料を積んで南北を往復し、活躍していた。

公園はミニ植物園になっていて、南国の木々や花が目を楽しませてくれる。公園の中央には高さ約4 mもある「松江春次」のブロンズ像が立っている。この像は南洋興発会社の従業員たちによって、1934年に建立されたものであった。

(上の写真の左は松江春次の像、右は豆蒸気機関車)

サイパンの製糖工業は直接・間接的に数千人の日本人、沖縄人、チャモロ族を雇用していた。

この事業の成功は松江春次氏の努力に負うところが多い。彼の大事業の一つは、島を一周して砂糖キビをガラパンやチャラン・カノアに運ぶ軽便鉄道の建設であった。我々の子供のころには日本各地に軽便鉄道が走り、懐かしい眺めであった。

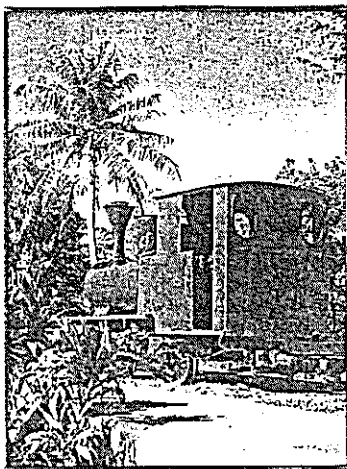
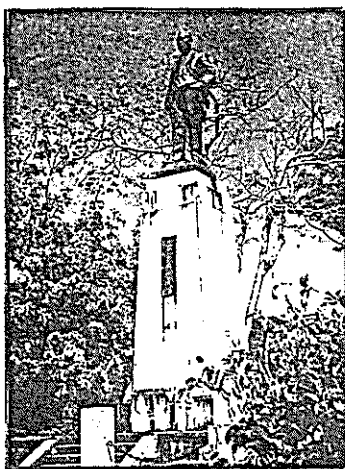
(右の写真は軽便鉄道のシュガートレイン)

最初の砂糖キビの栽培は人力で行われたが、後にはアメリカ製のキャタピラ・トラックターが輸入されている。

驚くべきことは、砂糖キビ粉碎工場から出てくる副産物から、アルコールを製造したことであった。

ガラパンやチャラン・カノアの製糖工場は戦火によって破壊され、ガラパン工場はタナバグ港の埋立地となっていた。

(右の写真は最初的人力で行っていた砂糖キビ栽培)



〔香取神社〕

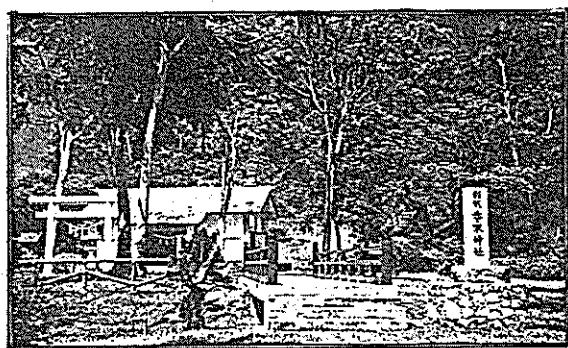
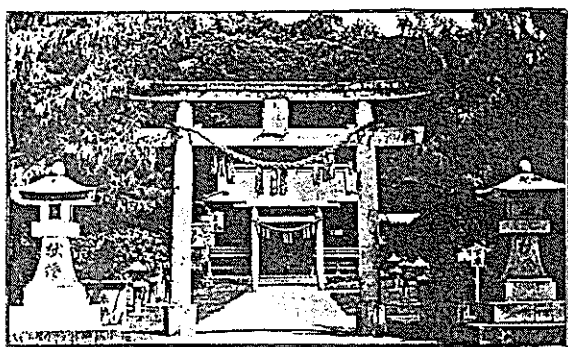
砂糖王公園に立っている松江春次の像の背後に広がる木立の中に、日本統治時代に祀られていた「彩帆神社」が社名を変え、「香取神社」として1985年に再建されていた。

前記したように、第1次世界大戦時の1914年10月14日、それまでドイツ領だったサイパンを日本の戦艦「香取」が無血占領した。

1919年6月に調印されたベルサイユ条約で日本は国際連盟の委任を受け、サイパンを委任統治することになった。そのために神社名を「香取」したのであろう。

当時のサイパン島民は日本人の行儀や礼儀、人を敬う心を尊敬していたと伝えられている。

(右上の写真は戦前の彩帆神社で、
下は現在の香取神社である)



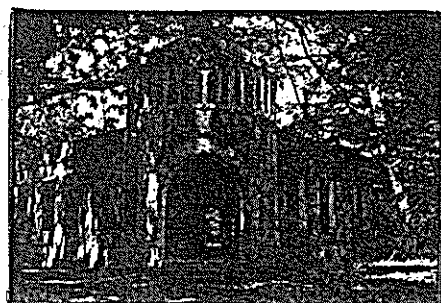
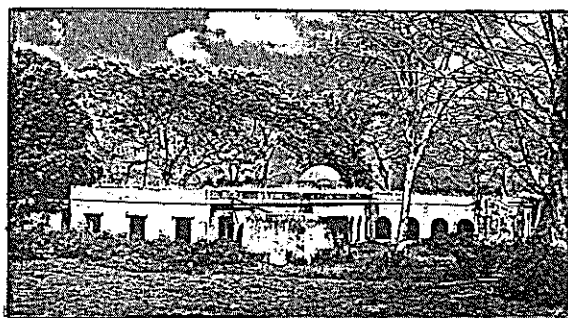
〔日本病院跡〕 (位置は11頁地図)

砂糖王公園の前の道路をはさんだ西側に、旧日本病院が昔の面影を留めて残っている。

日本統治時代に建てられたこの病院は、当時はミクロネシア最大の医療設備を誇っていた。

コンクリートと大理石で作られた建物はほぼ原形を保ち、内部もよく保存されている。

(右上の写真は旧日本病院の病棟、下の写真は病院正面玄関)



〔日本刑務所跡〕（位置は11頁地図）

日本病院の横にある日本刑務所跡は、熱帯樹林に囲まれた中に鉄格子（コウシ）が残っており、撃墜された米軍パイロットたちは捕らえられて、この刑務所に収容されていたと言う。

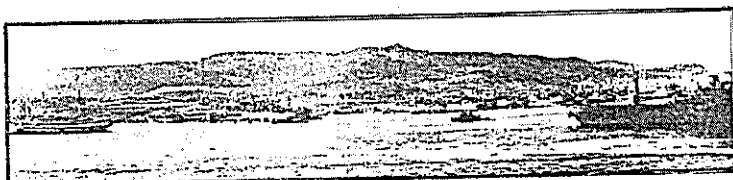
〔タナバグ港〕（位置は11頁地図）

現在、マニャガバ島に渡る観光船が発着しているが、米軍がサイパン上陸後は、米空軍基地と病院のための重要な供給港となった。

空軍基地に運ばれる爆弾や、フィリッピンや沖縄攻略の必需品は、この港で積み下ろされた。

港の内外には日米双方の飛行機や沈没船の残骸が海底にあり、現在では砂に覆われてしまって、大型のものだけ残っているようだ。

（右の上の写真は戦時中の米軍の艦船で賑わうタナバグ港の風景、下の写真は現在も港内に残っている撃沈された船舶の残骸）



〔キャピトル・ヒル〕（位置は11頁地図）

かつてアメリカの太平洋信託統治領行政本部が置かれていたから、この名がある。現在は議事堂や郵便局、図書館などの並ぶ閑静な地区である。

海拔201mの丘の上からは、マニャガバ島とタナバグ港が眼下に一望できる。

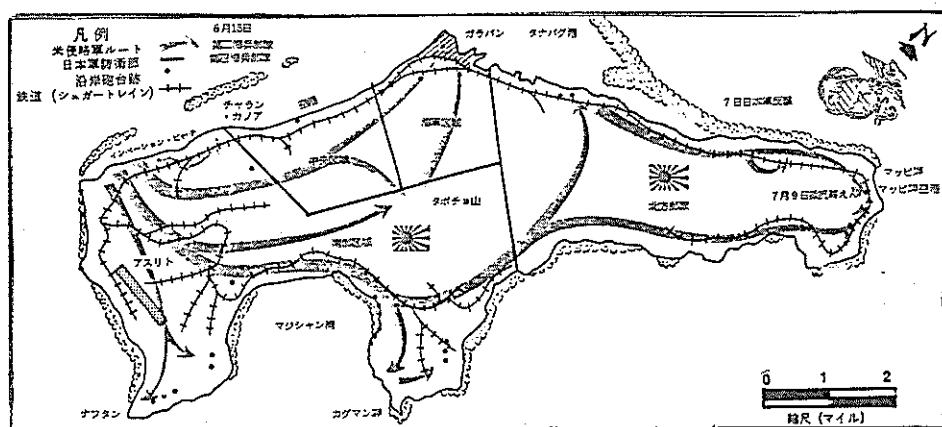
〔聖母マリアの祠〕（位置は11頁地図）

この辺りはサイパン戦の時に、後退した日本軍の臨時野戦病院が置かれていた所で洞窟が多い。マリア像は当時のカトリック教徒が洞窟に隠しておいたものである。洞窟内には清水が湧き出て神水とあがめられている。

（右の写真は美しい花に囲まれ、洞窟内に祀られたマリア像）



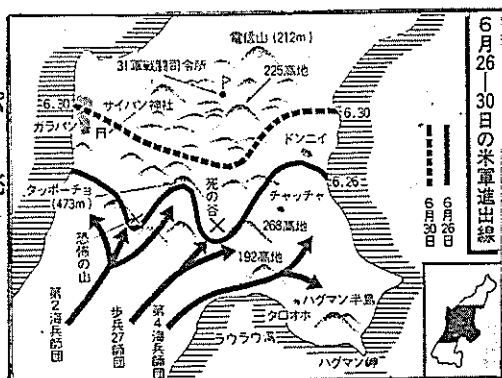
〔タポチヨ山〕（1頁と11頁の地図参照）



（右上の地図は上陸以来の米軍攻撃ルート）

「タポチヨ山」はガラパンの南東、サイパンのほぼ中央に位置している。海拔は473mでサイパン島の最高地点で、山頂からの眺めは素晴らしく、テナン、ロタなどの島々をはじめ、360度のパノラマが楽しめる。

（右図はタポチヨ山付近の戦闘要図）



タポチヨ山付近の攻防戦は6月22日から開始され、初日から各地で激しい戦闘が展開した。優勢な火力を誇る米軍は、高地や谷を利用した日本軍の櫛（クシ）形陣地に猛攻を加え、甚大な犠牲を出しながら、じわじわと前進した。

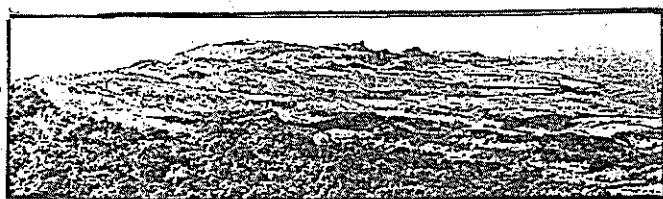
タポチヨ山周辺を守備した日本軍は、天然の要害を利用して巧みな攻撃をくり返した。険しい断崖の続く地形は日本軍の自動火器を隠し、山峡のジャングルや洞窟に立て籠（こ）もった日本軍は、神出鬼没、変幻自在の奇襲や夜襲で一步も寄せつけなかった。タポチヨ山の戦闘こそサイパン戦の天王山であった。

米軍公刊行戦史によると、いくら攻めたてても落ちず、損害が出るばかりの山を「恐怖の山」、頑強に抵抗した難攻不落の谷を「死の谷」と名付け、恐れをなしたと書かれている。（上の要図参照）

「寸尺を惜しむ決心強き日本軍」（米公刊戦史）の抵抗に米軍はたじたとになり、遅々として進むことが出来なかった責任から、米第27師団長は更迭されたことを考えると、兵力、装備ともに劣る日本軍は善戦したのであった。

兵力の差は10分の1、戦力の差は千分の1という日本軍は玉砕を覚悟して戦ったが、タポチヨ山は6月26日陥落した。

（右はタポチヨ山の景観）



北部地区

サイパン北部のマッピ山麓には緑の平地が広がり、海岸線には美しい景勝が続いている。

しかし、この一帯はサイパンで最も多く犠牲者を出した戦跡地であり、美しい自然の中に、平和な時代には想像もつかない悲劇が眠っている。

サイパンの首都ともいふべきガラパン町が米軍の手に落ちたのは7月3日であった。米軍は当初、サイパン占領後にガラパンの施設を最大限に利用しようという計画があった。

しかしガラパン方面から繰り出す日本軍の夜襲が毎夜続けられたため、計画を変更して艦砲射撃と空襲が行われ、地上軍も進撃した。

島の4分の3を失い、北の一角に追い詰められた日本軍の司令部があった「地獄谷」にも米軍は迫ってきた。

兵力はまだ1万人前後を数えるとはいえ、その多くは傷つき、戦うに武器はなく、弾薬も尽きた。指揮、命令系統は麻痺し、戦力はゼロに等しかった。

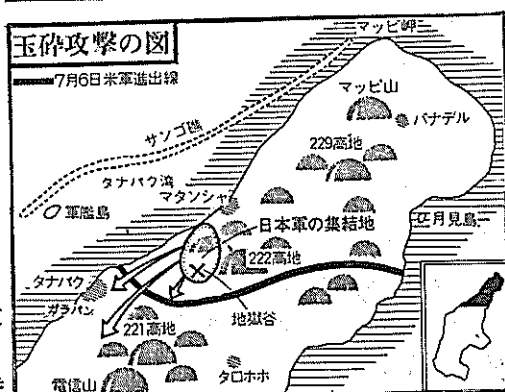
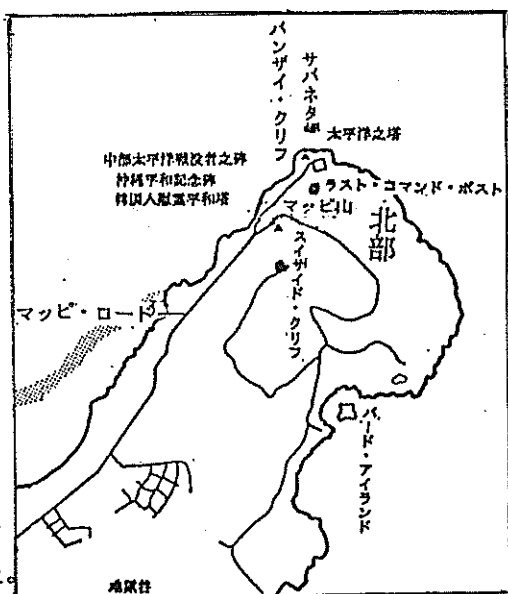
万策が尽きた7月5日夜、軍司令部では最後の作戦会議が開かれた。

参加したのは、海軍側が中部太平洋方面艦隊司令長官「南雲中将」、同参謀長「矢野少将」、陸軍側が第43師団長「齊藤中将」、第31軍参謀長「井桁少将」、同参謀次長「公平少将」、独立混成47旅団長「加島少将」である。

結論は誰にもわかっていた。北へさらに後退することは出来よう。しかし、それで戦局が好転する見通しはなかった。むしろ、民間人の老人や婦女子を戦禍に巻き込み、いたずらに犠牲を増やすばかりである。

軍司令部では会議を開くまでもなく、前日の7月4日にすでに玉砕の腹を決めていた。作戦会議も結局は、司令部の方針を追認するだけであった。

こうして7月7日未明を期して玉砕攻撃を敢行することに衆議は一決した。そして最後の総攻撃を前に、南雲、斉藤、矢野、井桁の四将軍は自決することを申し合わせた。残る将官の公平と加島の二人は、サイパンの戦況を大本営に伝えるため、万難を排して敵中脱出を図ることにした。(今後サイパンの二の舞を演じないための直訴)



自決を決意した四將軍の心中の一端は、大本營あての決別電報でうかがい知ることが出来る。

『臣等微力ニシテ陛下ノ股肱（ココウ）ヲ失イ、シカモヨク任務ヲ完了シ得ザリシコトヲ深く、陛下ニ御詫ビ申シ上グルトモニ、陛下ノ股肱ハ善戦オノオノ死所ヲ得タルヲ喜び、非戦闘員ハ（中略）島北部ニ退避セシメ、軍ハ最後ノ一兵マデ陣地ヲ死守玉碎セントス 聖寿ノ万歳ヲ唱フ』

〔四將軍の自決〕（後記するラスト・コマンド・ポストに於て）

洞窟の中央に立つ二本の蠟燭。その前に敷かれた真新しい白布。白布の上には刃にさらしを巻いた四振りの軍刀……。將校たちへの玉碎命令の下達が終わって、四將軍の自決の時がやってきた。

「閣下、長い間お世話になりました。私どもの至らぬために……。あすの総攻撃ではきっとこの仇を打ちます。そして後続く覚悟……」參謀が一人一人、進み出て別れを告げた。

恩賜のタバコの封が切られ、それぞれ最後の一服をしばし味わった。「閣下、お時間です」と副官に促され、四人の將官は座に向かった。

中央には中部太平洋方面艦隊司令長官南雲忠一、第43師団長齊藤義次の両中將が座った。その両脇に中部太平洋方面艦隊參謀長矢野英雄、第31軍參謀長井術敬治の両少將が並んだ。

姿勢を正し、はるか北の皇居に向かって遙拝した將官は、かたわらの軍刀をつかんだ。切っ先を腹に当てたとき、それぞれの後ろに介錯（カイシャク）のため立つ副官が、手にする拳銃の引き金を引いた。

たて続けに響く四発の銃声、どっと前のめりに崩れる四人の將官、鮮血に染まる白布……。參謀たちがかけ寄り、亡骸に取りすがって声を上げて泣いた。時は7月6日午後10時である。

〔玉 碎〕

7月7日午前3時頃、軍司令部の洞窟から十数人の將校が軍刀をさげ、拳銃を手にして出てきた。將官亡き後、総攻撃を指揮するのは43師団參謀長鈴木卓爾大佐らの參謀、副官たちである。

総攻撃といっても、武器は殆どなかった。銃は十人に一人も持っているだろうか。帯剣を先にくくりつけた木の棒を持つ者もいた。先をとがらせた棒だけの者もいた。素手で手りゅう弾だけを腰にぶら下げている者もいた。

黙々と歩く兵士たち、それは部隊と呼べるものではなかった。これから死地に赴く生き残った集団であった。しかし彼らは勇敢にも米軍砲兵陣地に手りゅう弾を投げ、ある者は銃剣を振りかざし、タナバグ港付近までも突進したのであった。

7月7日未明のバンザイ突撃で米軍の受けた損害は決して少なくなく、1500人余の將兵が失われている。米公刊戦史に次のように記されている。

『日本軍の悲壮な攻撃は、今までのどんな攻撃よりも激烈で、象の群れの襲来のようなであった。通常、戦闘の激烈さは戦力や死傷者の数によって測定されるが、それ以上に、兵士個々に与えた心理的効果を考慮されなければならない』と。

日本軍の突撃がいかに激しかったかは、米軍砲兵が7日午前4時15分から1時間に2666発、1分間に40発以上の支援射撃をしたことからでも明瞭である。

〔サパネタ岬（バンザイ・クリフ）〕（16頁地図）

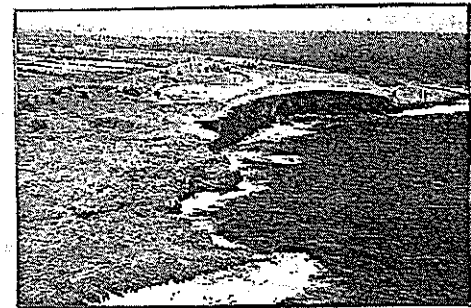
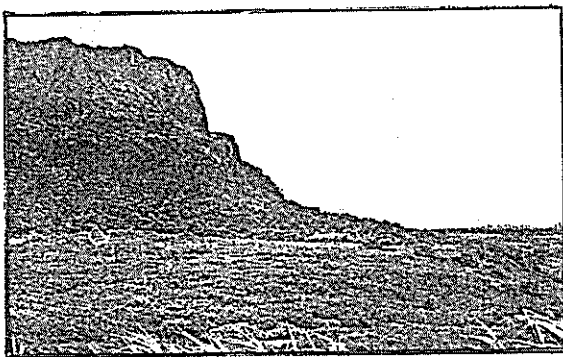
サイパン島最北端の「サパネタ岬」は、通称「バンザイ・クリフ」と呼ばれるところである。

約80mの高さの断崖から眺める海岸は、紺碧の海に白い波頭が立ち、波が岩に碎けて白く散り、力強い美しい景観である。

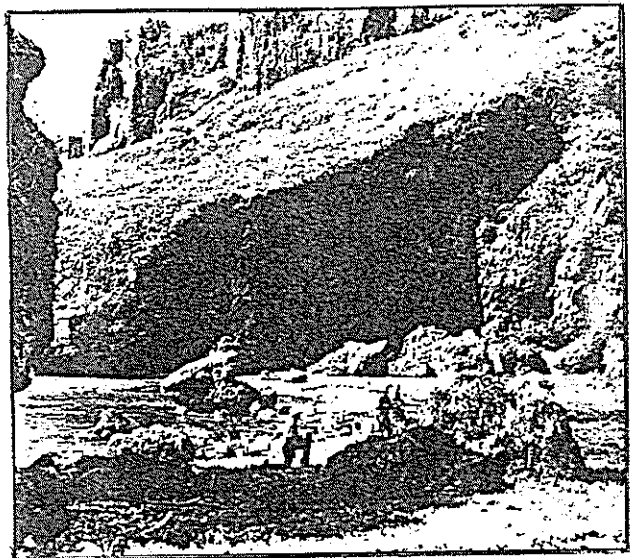
しかしサイパン戦末期の1944年6月、北に追いつめられて逃げ場を失った日本軍の兵士ばかりでなく、民間人も大挙して「バンザイ」を絶叫しながら、次々と海に身を投げ集団自殺をした悲劇の場所である。

愛国心に燃えていた当時の日本人の心が我々の心を衝く。「悲哉」

（写真は各角度から撮影したバンザイ岬）



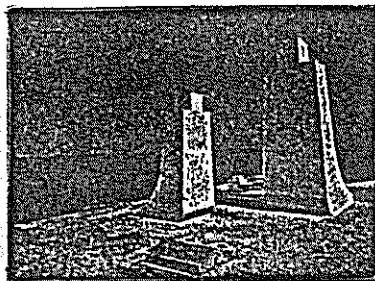
右の写真は、いま米軍が海側から投身自殺を阻止しようと近づいているが、一方、この米軍を狙撃しようと日本兵が待っている岬の崖下海岸。



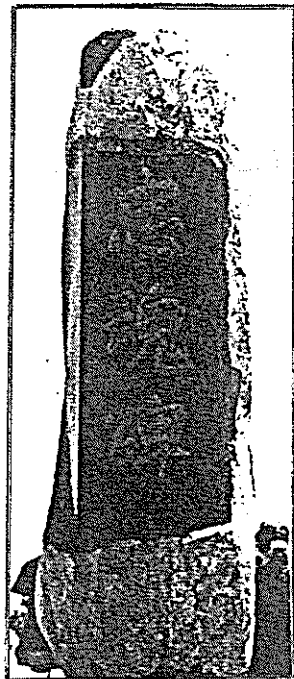
〔パンザイ・クリフの慰霊の数々〕

美しい南国の海を見下ろす崖の淵に、慰霊と平和の願いをこめた白亜の「太平洋之塔」が、静かに悲しい歴史を見守るように立っている。

右側の左の写真は太平洋之塔で、平和を祈る日本の学生によって建立された。

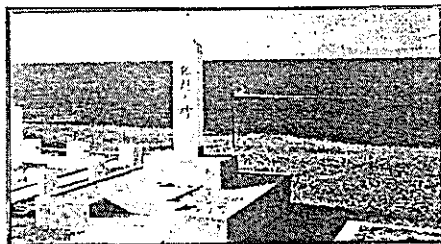
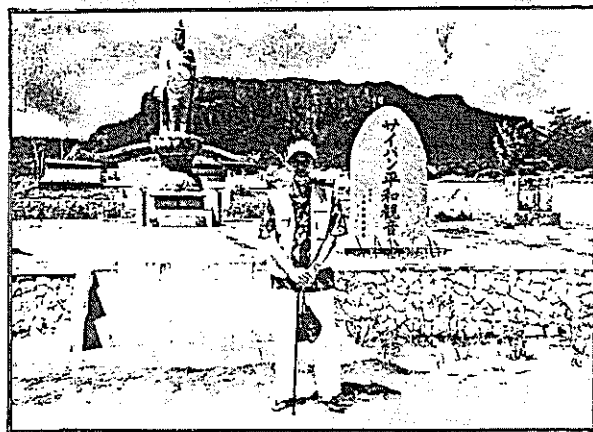


右の写真はパンザイ・クリフの展望台横に立つ、高さ5mほどもある原石に「忠魂碑」と刻んだ慰霊碑で、戦友が建立したのであろうか。



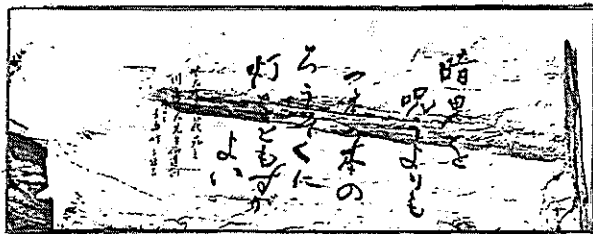
右下の写真は「北村之碑」。北村の生存者が亡き村人の霊を弔うために建立したものである。

崖淵から離れた平坦な地を石垣で囲い、マッピー山を背景にし「サイパン平和観音」が立っている。(下の写真)



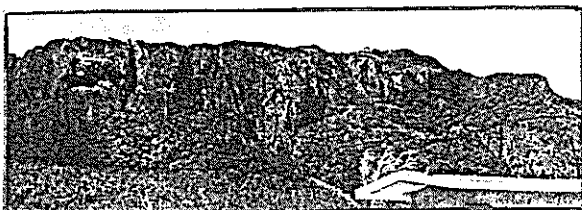
平和観音の敷地内に左下の写真の句碑が立っている。(下記)

「千代八千代
かけて祈らん
この平和
むだにされまじ
ますらおの死を」
「暗黒を呪うよりも
一本一本の
ろうそくに
灯をともすが
よい」



〔ラスト・コマンド・ポスト〕（16頁地図参照）

バンザイ・クリフからビーチ・ロードを引返してマッピ山麓に向かうと、街道には南洋桜が真っ赤な花を咲かせている。



右上の写真はマッピ山の全景。

右下の写真は街道風景。

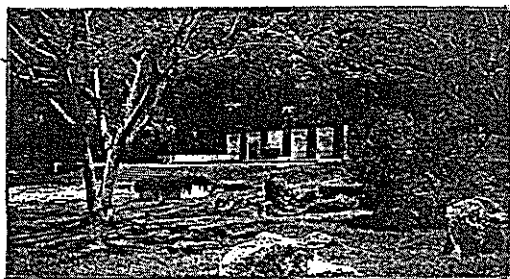
サイパン島最後の激戦地となつたマッピ山の周辺には、戦没者のための慰霊碑や塔が数多く立っている。これらをサイパンでは北部慰霊碑群と呼んでいる。



ラスト・コマンド・ポストの手前に立つ「中部太平洋戦没者之碑」は、日本政府によって建立されたサイパン島最大の碑で、石燈籠を配した日本風庭園が造られている。

毎年ここで慰霊団による法要が営まれているが、我々も自ずから襟を正して合掌する心になってくる。

（右の写真は中部太平洋戦没者之碑）

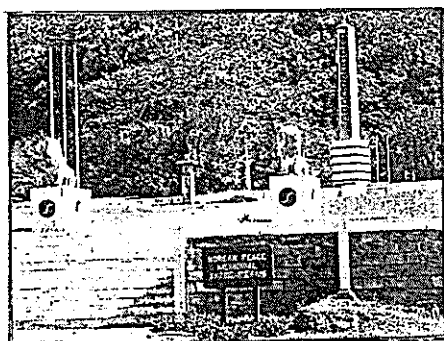


中部太平洋戦没者之碑と横一線に並んで「沖縄平和記念碑」や「韓国人慰霊平和塔」などが立っている。

沖縄平和記念碑は砂糖キビを栽培するたにサイパン島に渡り、犠牲になった沖縄県民を慰霊するために立てられた。

韓国人慰霊平和塔は、韓国人の志願兵や徴用（チョウヨウ）されて犠牲になった人たちを慰霊するためである。

右の写真は韓国人慰霊平和塔。

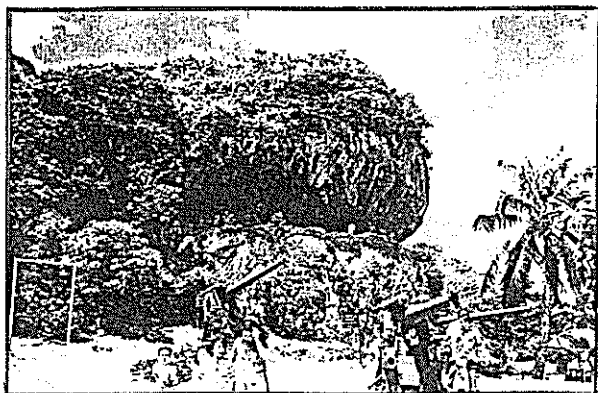


マッピ山の山腹にある崖の下の洞窟を利用したトーチカは、日本軍の最後の司令部跡で、「ラスト・コマンド・ポスト」と呼んでいる。

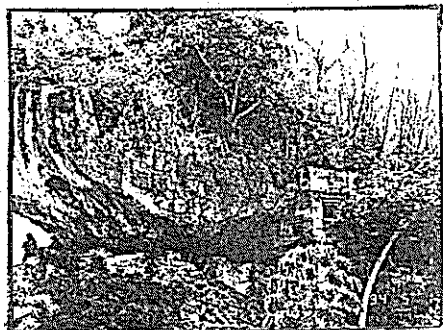
洞窟をコンクリートで固めたトーチカの側面には、射撃するための銃眼が開いている。

中部太平洋方面艦隊司令長官南雲海軍中将、第43師団長齊藤陸軍中將ら四人の将官がここで自決し、日本軍の組織的戦闘は終結した。

(右上の写真は、慰霊碑群から日本軍が使用した小道を通ってマッピ山に向かうと、崖の下に見える断崖の割れ目、これがラスト・コマンド・ポストの外観)



(右の写真は洞窟の割れ目を拡大した写真。割れ目の右端に銃眼が見えている)

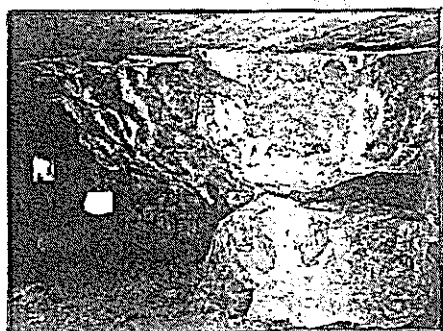


(右の写真は、洞窟をコンクリートで固めたトーチカの内部で、銃眼が見える)

ここで南雲中将、齊藤中将、矢野少将、井桁少将の四人の将官が自決した。細部の記事は16、17頁を参照。

この光景は、沖縄の摩文仁ヶ丘で自決した牛島陸軍中将の洞穴を想起させる。

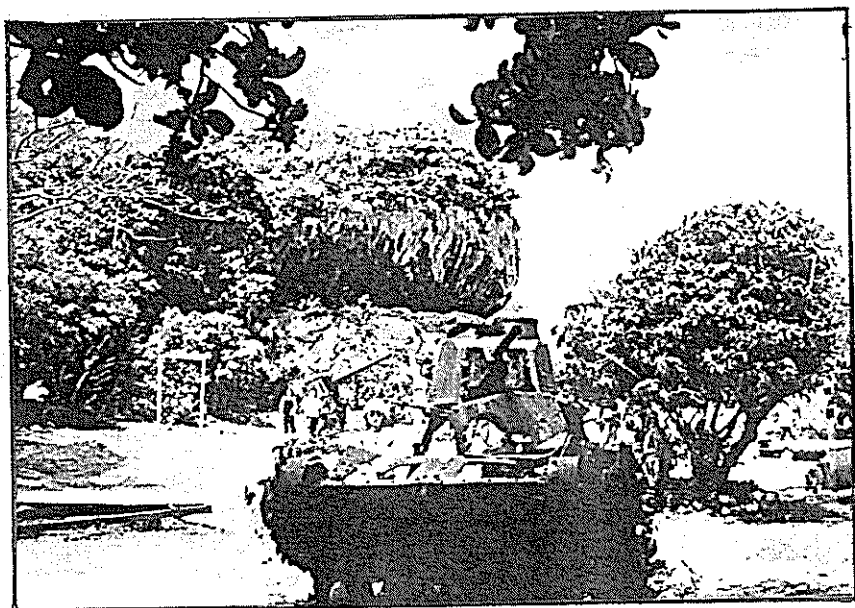
太平洋の防波堤たらんと戦死したサイパン英霊に哀悼の意を表したい。



右の写真の南雲海軍中将(左)は真珠湾攻撃の艦隊を指揮し、サイパン戦の責任を負って自決。

右の写真の東条陸軍大将(右)は時の日本の総理大臣、陸軍大臣、参謀総長で、サイパン陥落の責任をとって辞職した。





ラスト・コマンド・ポストの前の広場には、大砲や戦車の残骸が残されていて、当時の生々しい戦闘の凄（スサ）まじさを物語っている。

（上の写真及び前頁の一番上の写真は、戦車と大砲の残骸）

7月7日の日本軍のバンザイ突撃が終わってから、占領宣言までの2日間、米軍は日本軍敗残兵の掃討戦を展開した。しかし洞窟や岩陰にひそむ日本兵にとって、占領宣言は無縁のことで、頑強に抵抗する小さなグループの戦いは依然として続いた。

米軍公刊戦史は「島のあちこちに隠れた日本兵を狩り出す米軍にとって、占領したという言葉は心理的な意味を持つに過ぎなかった。洞窟の暗い陰から撃たれる可能性は相変わらずで、将校も兵も、勇敢さよりも用心深さが称賛され、積極性より忍耐が一層重要になった」と書いている。

さらに公刊戦史は戦った日本軍兵士について、「日本兵は個人的にはこれまで強調されていた通り、豪勇であった。日本兵はよく戦ったが、火力が不十分で不適當であった。彼らに言えることは、武器が十分でなかったことだけである」と述べている。

「今や止まるも死、進むも死」

「敵を索（モト）めて発進する」

という当時の日本軍の思想の一端が窺える。

（右の写真はラスト・コマンド・ポストの砲）



〔スイサイド・クリフ〕（自決の崖）（16頁地図参照）

標高249mのマッピ山々頂の東側は、約200mの断崖となっており、下部の4、50mまでは、はい登ることができるが、その上部は切り立った断崖が空高くそびえている。

1944年7月、サイパン島の日本軍最後の砦（トリデ）が破られ、マッピ山と最北端の岬とのわずかな空間に追いつめられた日本軍兵士と民間人は、バンザイ岬の悲劇のほかに、多くの悲劇が発生した。

7月6日にはマッピ山の南山麓まで進出した米軍に追われ、山頂まで逃げこんだ民間人にもう逃げ場はなかった。前のはのぞきこむだけで目がくらむ垂直の崖である。後ろには米軍の戦車や砲弾が迫ってくる。

敵に捕まったり、殺されるよりは自ら死を、と崖から一家そろって身を投じた人も多かったようである。

又、地形を知らない日本兵たちが夜間、北へ北へと逃げようとして、前の兵隊に続いて一步足を踏み出すと、そこは空間で、200m下まで落下した。兵が飛び降り自殺を図ったか、誤って転落死したかは別として、おびたしい人が死んだのである。

後日、誰が名づけたのか、この崖を「スイサイド・クリフ」（自殺の崖）と呼んだ。

上の写真はスイサイド・クリフの断崖の写真。

右の写真はマッピ山と自決の崖の全景。

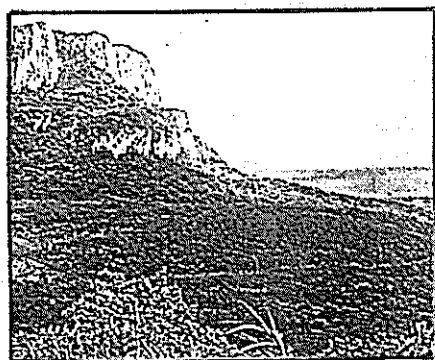
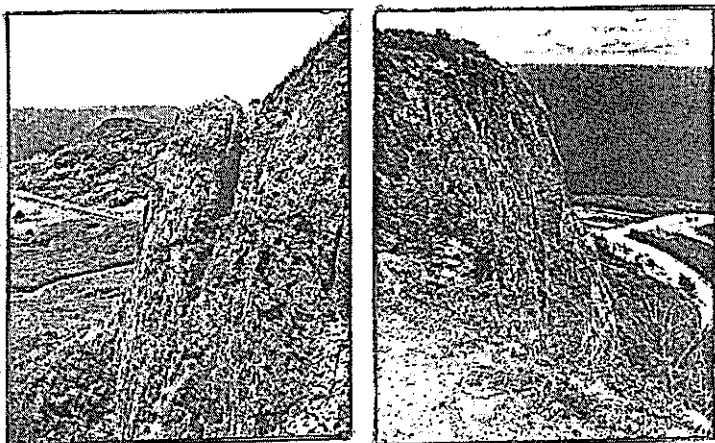
当時の日本軍人は「生きて虜囚（敵に捕らわれること）の辱（ハズカシ）めを受けず」と教えられ、絶対に投降することは禁じられていた。

しかし一般の民間人、特に女や子供までにもその精神が浸透（シントウ）していたのだ。

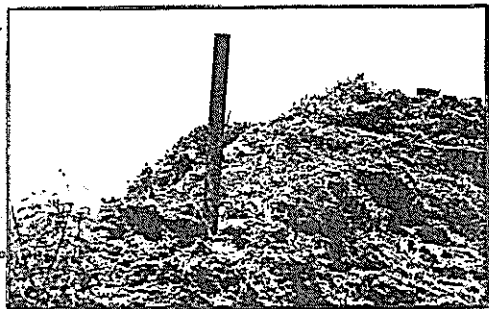
価値観のことなる現代人には理解は困難・？

崖の上から見下ろす景観は素晴らしく、眼下に「飛ばずの飛行場」と呼ばれる日本軍のゼロ戦の基地が見える。

（右の写真は飛ばずの飛行場跡）



小さい順に並んだ兄弟を順番に突き落とし、最後に残った父親は、自分の最後の一步がわからないように、後向きに進んで自決した家族や、家族が手をつなぎあって円を作り、父親の手りゅう弾で自決したという、バンザイ岬の悲劇と同じ時期に起きたスイサイド・クリフの上は、今、平和記念公園となっている。



崖の淵の岸壁の上に戦友が立てた慰霊のための墓標が立っている。(右上の写真)

墓標の傍らに素人(シロウト)が彫刻した慰霊の句は、悲しい涙を誘ってくる。

「わが戦友は

皆散り果てて(?)

夏の日」

生還者真魂(?)

右の写真は慰霊の句碑で、彫刻した文字はサンゴ礁の岩のため崩壊している。



平和記念公園の広場の中央に小さな観音像が立っていて、訪れる人の注目を集めている。

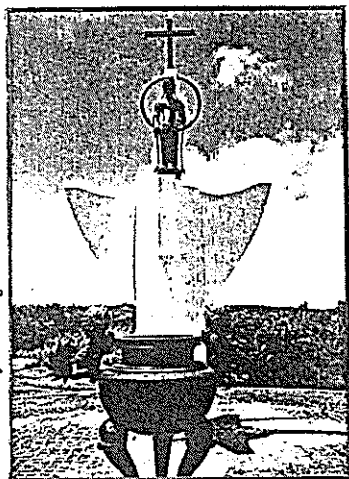
右の写真は平和観音像で、仏教・キリスト教が混合し、珍しく十字架を背負い、香炉が据えられている。

像の下「建立記」には次のように書かれている。

日本の委任統治時代に、ここに住んでいた人々によって発起され、アメリカ信託統治領政府の賛同をえ、ミクロネシアと日本の人々の協力によって出来上がりました。

このあたり一帯は、太平洋戦争のさい、最も激しい戦場となり、その犠牲者はミクロネシアと日本の一般市民、アメリカと日本の軍人、軍属など数万人に達しました。

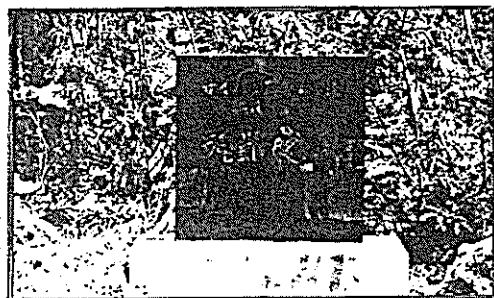
この像は、国籍のいかんを問わず、亡くなられた方々の霊を慰め、この世に再びおろかで悲しい戦争が起こりませんように、永遠の平和を祈願するためのものです。(1972年)



広場の片隅に黒大理石の石碑が祀られている。この碑には「サイパン高等女学校 職員生徒「殉難之碑」」と刻まれていた。

(右の写真はサイパン高等女学校の碑)

日本領時代にサイパン、テニアン、ロタ島で砂糖事業を興した南洋興発会社の建てた神社の跡も、この山頂に見える。



平和記念公園からの美観はバード・アイランドが手に取るように見える眺望である。

石灰岩の白い小島のバード・アイランドは、鳥たちの巣に適した無数の穴があり、夕方になると沢山な海鳥が群れをなして集まってくる。

日本の統治時代は「月見島」と呼ばれ、月見の名所として島民に親しまれていた。

(右上の写真はバード・アイランド、位置は16頁地図の右側の小島)



マニャガハ島 (軍艦島とも称す。位置は下図参照)

マニャガハ島は軍艦島とも呼ばれる小島で、現在は美しいビーチとマリンスポーツが楽しめる、南洋の魅力があふれる観光の島となっている。

沈没船の残骸が海面に横たわるタナパグ港から、グラス・ボトム・ボートに乗船して、約15分ほどで島の桟橋に着く。

タナパグ港を離れると、まもなくガラス張りの船底にサンゴ礁が映ってくる。

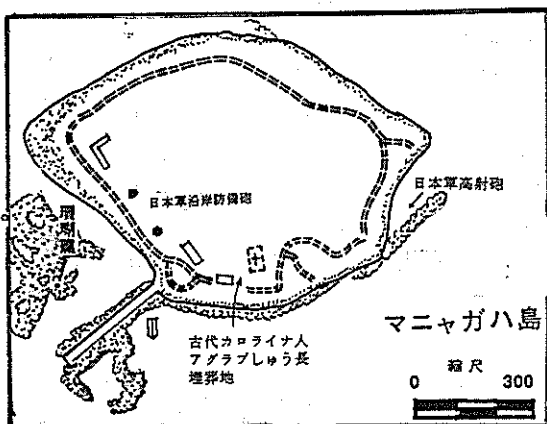
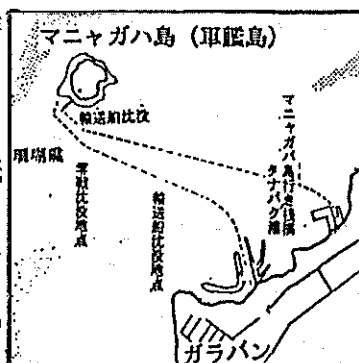
サイパンの西海岸を取り巻くリーフ(サンゴ岩礁)の中にある島の周囲は2400m、徒歩で一周15分だ。

海岸は輝く白砂にヤシの緑がマッチして美しく、島が米軍に占領されたのは7月13日のことであった。

海軍第五根拠地隊が砲8門を据え、海軍の要塞としてから、マニャガハ島という名に代わって、軍艦島が通称となった。

島を守っていた僅かな警備隊は、米軍のサイパン上陸前から始まった空襲や艦砲射撃で壊滅し、米軍が島を攻撃した時には少数の残存兵だけであった。

(下はマニャガハ島の全景写真)



米軍はこの小さな島を攻めるにも完璧を期した。上陸にあたって空中写真までとり、支援の猛烈な砲火を浴びせた。

7月13日午前11時から15分間に、105ミリ砲900発、75ミリ砲720発を撃ちこんだ。恐らく一木一草も無くなったことだろう。日本軍の補給軽視による犠牲続出の思想とは、雲泥の差である。

米公刊戦史に「米軍は抵抗を受けずに作戦を完了し、1時間以内にマニャガハ島を占領した」と記録されている。(砲撃の結果だ)

このマニャガハ島が占領された翌日の7月18日、東京の大本営は「サイパンの玉砕」を発表し、在留邦人も戦い得る者は戦闘に参加して将兵と運命を共にした、と報道した。同日、東条内閣は総辞職したのである。

タナバグ港を出航してマニャガハ島の栈橋に上陸すると、サイパン戦で破壊された真っ黒に錆(サ)びた船体が、エメラルド・グリーン海面の上に、見え隠れしている。

しかし何時かは浸蝕(シンショク)されて海底に沈む運命にある。

(右の写真の上2枚は撃沈された船体の残骸)

マニャガハ島を訪れると、太平洋戦争の末期の物資の欠乏にもかかわらず、日本兵士は戦闘を断念することなく、精神力だけで戦った状況がうかがわれる。

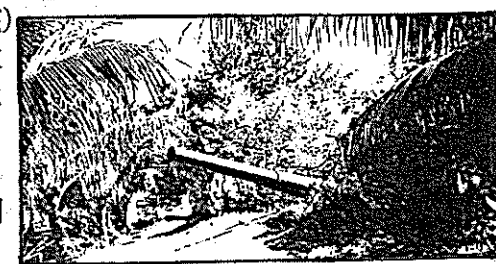
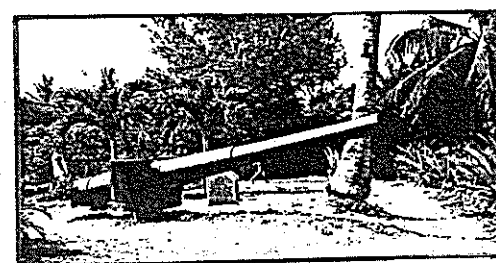
しかし精神力だけでは戦えないのも、戦闘の実相である。

栈橋を渡った島には鉄筋をむき出しにしたトーチカのコンクリートが目にとまり、戦闘の壮絶さを物語っている。

トーチカをはさんで2門の大砲が昔の面影を残し、激戦の跡が偲(シノ)ばれる。

(右の写真の上から3～4枚目は大砲の残骸、5枚目は破壊されて鉄筋がむき出しになったトーチカ)

要塞とはいえ孤立して守れるものではなく、戦闘は総合戦力の問題である。海軍には海軍、空軍には空軍が対戦しなければ、陸兵だけでは玉砕の運命だけが待つのみだ。



右の写真は、島の東海岸から
サイパン本島の北部のマッピ
山やバンザイ・クリフを望む
景観。

海岸は白砂で海上にはサンゴ
礁が見える。



右の写真は、敵の砲撃・爆撃をさけるた
めの退避壕の跡。(島の南海岸)

ここからテナン島がかすかに見える。
テナン島は日本軍も民間人も玉砕した島
で、ここから広島・長崎に原爆を投下した
原爆搭載機が発進したのであった。

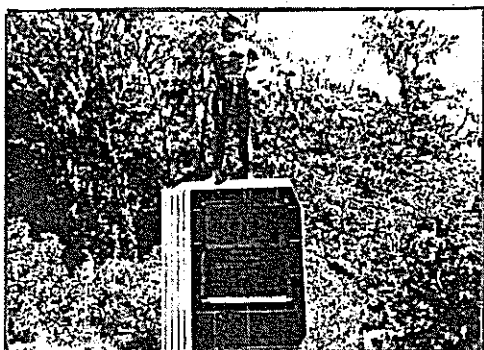


右の写真は、マニャガハ島の南側に立つ
カロライナ人の酋長(シュウチョウ)であ
る「アグラブ」の像。

彼はこの下に埋葬され、禪(フンドシ)
と杖を持った像が、記念として奉納されて
いる。

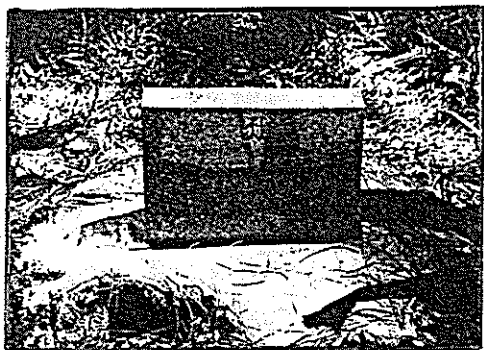
カロライナ人は、ミクロネシアの一部の
カロリン諸島に住む住民で、1800年代
の初めからサイパン島に住み着いた。

記念碑には、1815年にカロリン諸島
からサイパン島に渡ったと彫刻されていて、
上陸時の写真を銅板に印している。



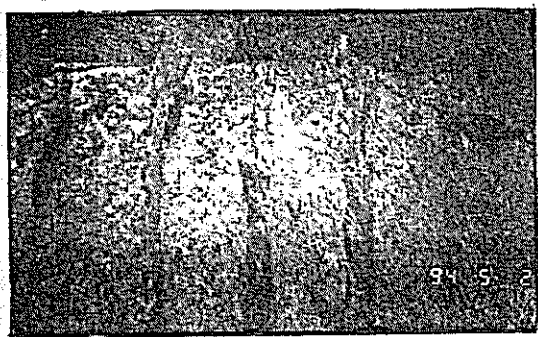
右の写真は、この島で戦死した兵士の両
親が可愛い息子のために立てた墓である。
墓石は日本から運んだ御影石で、「南滄院
仁和建誠居士」の法名が彫まれ、「わが子
よ、安らかに眠り下さい」と刻まれていた。

親の愛情は、山よりも高く海よりも深し
である。



海底に沈む潜水艦や輸送船、それに
ゼロ戦の残骸を見学するツアーに申し
込むと、グラス・ボートが約30分で
その海域を回る。

(右上の写真は船体の肋骨で、輸送船
か潜水艦かは不明)



(右下の写真は、ほぼ完全な状態で残
るゼロ戦の残骸)

ゼロ戦は旧日本海軍の「零式艦上戦
闘機」の通称で、完成したのは太平洋
戦争の直前であった。

極度に軽量に設計されていたため航
続距離が長く軽快で、当時の世界水準
を抜いた単座戦闘機であった。

(陸軍はこれに匹敵する隼(ハヤブ
サ)戦闘機が活躍していたが、共に米
軍のように量産できなかったことは、
悔やまれてならない)

サイパンの戦闘は太平洋戦争の末期
のため、それまでの戦闘で失った優秀
な操縦手の補充ができず、資源の少な
い日本の補給能力には格段の差があり、
その上、科学兵器の劣勢から国運を賭
(カ)けた決戦で敗れたのである。

(右は島のガジュマルの大樹を背景に
して孫達と、下はマニャガハ島の栈橋
上で駒谷一家と記念に撮影したもの)



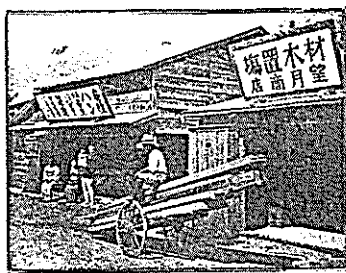
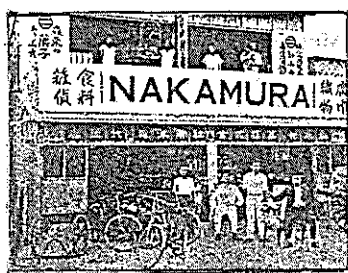
ハファダイ・ビーチ・ホテルのチャモロ族ショーにて



バンザイ・クリフにて記念写真

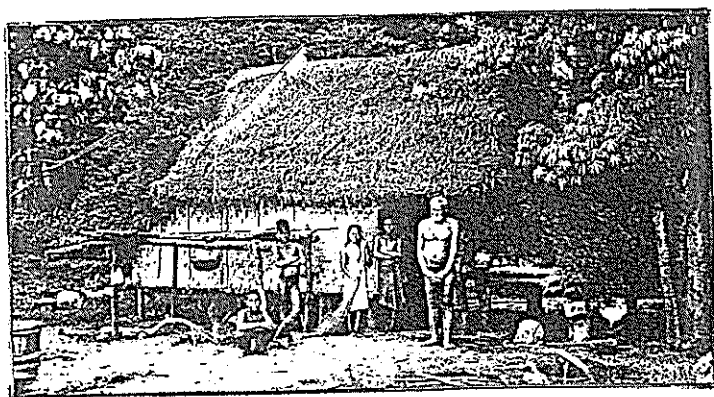


下は日本が統治していた時代のサイパンの商店の写真で、これらの商店は砂糖王として語り継がれている松江春次氏によって開発された、製糖工業の影響が大きい。



サイパンのカロリニア人社会は、日本の統治下にあっても古い伝統を継承していた。

右は彼らの草葺の家屋と生活の写真。



日本人はカロリニア人やチャモロ人と、右のように一緒に写真をとって楽しんでた。



今年は1944年のサイパン玉砕から満50周年の節目の年であった。この時に当たり女婿・駒谷康文氏はサイパンの家族旅行を企画し、我々夫婦も招待に与ったことは時宜に適して意義深く、その厚意に対して深甚の謝意を表したい。

サイパン戦の当時、私は陸軍士官学校に奉職して後輩の教育に従事し、刻一刻と伝わってくる戦況を説明し、教育の一端としていた。

その微かな記憶の糸をたぐって訪れたサイパン島は、直接、自らが参加した戦場のような心境に陥った。その感懐と、孫たちに遺す旅の思い出として写真集を綴った。その為文章はなるべく平易に、そして仮名をふった積りである。

戦後、私自身が戦闘に参加した中国戦線やビルマ（現ミャンマ）戦線の各地を訪れ、亡き戦友の眠るニューギニア、フィリッピンなどの戦場も視察した。しかし50年以上の歳月は戦跡を風化させ、今は殆ど観光名所の楽園となっている。

玉砕の島サイパンは戦闘の傷跡は深く、今もなお陸上には大砲や戦車、海中には艦船やゼロ戦の残骸が遺り、各所に慰霊碑が立っていた。

特に国家と運命を共にしようと思決意した日本軍兵士や民間人が、万歳（バンザイ）を唱えて崖から身を投じ、自らの命を断ったバンザイ・クリフや、スイサイド・クリフは、我々に何かを語りかけてくるようであった。

断崖の淵に立った私は、このような美しい海に囲まれたサイパン島で、なぜ日米が戦わねばならなかったのか、もっと早く停戦できなかったのか、と自然に当時の歴史を回顧していた。

昭和17年6月（1942）のミッドウェー（2頁地図）海戦で、我が海軍は主力空母4隻を始め、優秀な航空機と操縦手が全滅するという大損害を被り、この時点で日本海軍は戦闘継続能力を失ってしまった。

続く昭和18年（1943年）1月のガダルカナル島（2頁地図）の敗戦と撤退、ニューギニア島（2頁地図）の大敗という状況の中で、大本営は小笠原からサイパン・グアム、それにインドネシアを結ぶ線を絶対国防圏と称し、今まで海軍が守備していたサイパン島に1944年3月頃から逐次、3万の陸軍を送った。

サイパン島は淡路島の半分にも満たない小さな島で、陸軍を始めとする地上軍だけで守れるものではない。太平洋戦争の主役は海軍と空軍の戦闘であって、島嶼（トウショ）防御の主体は海・空軍でなければならず、現況を無視した戦闘である。

サイパン島最北端のバンザイ・クリフから大洋を眺めて、「絶海の孤島に陸軍の大兵力を派遣することは、海中に塩を撒（マ）くようなもの」だという反省が浮かんできた。即ち消えて無くなる運命にあるからだ。

結果論だが、ここで「停戦」に踏み切っておれば、その後のフィリッピンや沖縄、ビルマの凄惨（セイサン）な死闘や、広島・長崎の原爆の被害など、数百万の犠牲が免れたのではないだろうか。

戦況の不利な中で、「停戦」という「弱気」の決心をすることは、血気の勇氣よりも更に強い勇氣が必要である。このことは幾多の死闘を身を以て戦った私の体験からである。

歴史を繙（ヒモト）いてみると、その点、明治の政治家や軍人は偉かったと思う。日清戦争後の独・仏・露の三国干渉で遼東（リョウトウ）半島を涙をのんで返還した勇氣、日露戦争後のポーツマス条約で国民の不満を押さえて結んだ決断は、弱気のよ

うだが勇気のいる決断であった。

軍は戦術や戦略といった純軍事的な研究に没頭し、「戦争指導」の研究について怠っていたという誹（ソシ）りは免れない。

「戦争」は政治の延長であり、「戦争指導」は政治の範囲である。旧軍の典範令の綱領の第一に「軍の主とするところは戦闘にあり」とあった通り、軍は戦闘だけに専念すべきであった。

「戦争」と「戦闘」とは、どこが違うのだろうか。ともに戦うことを意味しているが、違うのではないだろうか。「戦闘」は「戦術を練り武器を使って敵と戦う」ことで、軍が主体である。

「戦争」は戦闘も含めた全国家的な闘争で軍の独り舞台ではなく、政治が主体となった各種各層の力を結集した戦いである。その点、反省すべきは旧軍であり、現在のシビリアン・コントロールは当然のことである。

サイパン戦が終わって満50年、日本本土では遠い昔に忘れられてしまった戦争を、サイパンの崖や岩山、海岸の小さな砂の粒まで語りかけてきた。そして私に戦争を反省する多くのことを教えてくれた。

玉砕という言葉も知らない孫たちよ、日本の平和と繁栄の陰に、サイパンのような悲惨な犠牲が秘められていることを知って欲しい。それが戦争で亡くなった方々への供養である。

青い海原が果てしなく広がり、万古の波が岸に打ち寄せ、白いカモメが飛んでいたサイパン島、そこで散華された同胞に思いを馳せ、霊を慰めながら写真集の完とする。

バンザイ・クリフに立って感慨無量



サイパンを旅して

若きらの水着まぶしきサイパンに五万の遺骸（イガイ） いまだ還らず

「わが戦友は皆散り果てて夏の日」と彫られし礁（イワ）に立ち居すなり

かもめとぶ紺碧の海 自死したる五万のいのち生きたかりしを

つきあぐる裡なる叫びを呑み込みてひたすら海に對ひて居たり

マクマオのくらき茂みゆ黄の蝶のゆらゆらと翔つ 海に向ひて

弾痕のくまなき洞窟（ホウ）に赤錆びし兵機晒さる玩具のごとく

若ものの被写体となり砂丘に抱身一基あかさび果つる

海底のゼロ戦闘機あまりにも小さし錆びてすすめだいあそぶ

呪ふより一本の灯を 耕すよりマリンスポーツを サイパンのいま

十字架と観音像をともに置きいのりと花をたやさぬ島人

人間五万のむくろをいだく波の音サイパンの海の夕あかねして

マニヤガハ島めぐる二十五分に墓碑いくつめかづきて来しサイパンの旅

